

親子の問題 事例集（3） ～頑固な父親と多忙な娘～

多様化する親子関係の事例の3回目です。今回の主人公は、埼玉県在住で2年前に妻に先立たれた西村勲さん（78）です。

勲さんは一流企業で懸命に働いて、本社を定年退職後も、子会社の営業部長として70歳まで現役で仕事をしていました。亡くなった妻の晶子さん（享年70）は、専業主婦としてそんな夫をまさに内助の功で支えてきました。



どうせ6つも年上だし、不摂生なサラリーマン生活をしてきて糖尿病や高血圧もある自分の方が、妻より先に逝くだろう・・・と思っていた勲さん。しかも子会社を引退してから5年後には、一度、脳梗塞で救急搬送され、一命を取り留めました。その後遺症で、言葉が鮮明に発することができなくなり、手足にも若干の麻痺が残り、歩行も杖でやっと歩ける程度という状態になった矢先、妻に進行した癌がみつかり、あっけなく亡くなってしまったのです。

勲さんと晶子さんには、札幌在住の長女・堀田美紀さん（40）と、神奈川県在住の次女・山本真紀さん（36）の2人の娘がいます。それぞれまだ小学生の子供を2人ずつ育てながら、共働きで毎日忙しい生活を送っています。

妻の死後のさまざまな手続きがようやく落ち着いた頃、勲さんは自由の利かない身体でひとり自宅に残されてしまったことで、大きなストレスを抱えてしまいました。

娘たちにはそれぞれの家事・育児・仕事があるので、父親の勲さんには何とか介護保険をうまく使いながら生活してほしいと思っていましたが、頑固で気難しく家事など一度もやったことがなく、すべて家庭内で妻が切り盛りしてくれる環境しか想像できない勲さんには、他人が家の中に入ってきて介護をしてもらうということに対して、拒否反応を示しました。

「2人も娘がいるんだから。俺は娘にやってもらおう。ここまで育ててやったんだから、当然、娘が父親の面倒を見るべきだろう。」の一点張りでした。

特に神奈川県に住んでいる次女・真紀さんに対しては、1日に30回も電話が掛かってくる日もあり、真紀さんはついに心療内科で鬱病と診断されてしまいました。

美紀さんと真紀さんのそれぞれの夫から、勲さんに対して「今の状態では、関わることはできない」との通告がなされましたが、勲さんは「こんな娘たちに育てた覚えはない」と首をかしげるばかり。

娘たちの夫らが、勲さんに身元保証事業者を紹介し、ようやく勲さんも観念して老人ホーム入居を目指すことになりました。

落ち着いた頃に、父親と娘たちの心の絆を取り戻せることを願うばかりです。